「むくげ通信 294 号 2019.5.26 より」

宣伝記事

「北朝鮮を知るための 55 章【第２版】」

山根　俊郎

★遂に出版！！！

明石書店から石坂 浩一（編著）「北朝鮮を知るための 55 章」【第２版】（エリア・スタディーズ）単行本Ｐ310（ソフトカバー）が 2019 年５月 12 日に発行された。定価は、本体 2,000 円＋税＝2,160 円。

どうぞ、お買い求めいただくようにお願いします。

内容紹介

米朝首脳会談後、世界が最もその動向に注目している北朝鮮とはいったいどんな国なのか？

なぜ朝鮮戦争の終結にこだわるのか？

北朝鮮の歴史・政治・経済・社会・文化・外交を、最新の研究と客観的な分析を踏まえ 55 章に分けて解説する最新の北朝鮮入門書。

★充実した執筆陣

１．石坂 浩一（いしざか・こういち）1958 年生まれ。立教大学異文化コミュニケーション学部准教授。韓国社会論、日韓・日朝関係史。編集もされている。

：序章、第Ⅰ部 北朝鮮を理解するために、第Ⅱ部 北朝鮮国家の歴史、第Ⅲ部 北朝鮮政治のしくみ、第Ⅳ部 南北関係と外交関係、第Ⅴ部 北朝鮮の経済と暮らし。

第１章 なぜ朝鮮半島では冷戦が続くのか 東アジアの冷戦終結のために～第 35 章 食糧事情 生産の回復と供給システムの不備。実に**３５ケ章**を執筆されている。

おまけに、巻末に**「北朝鮮を知るためのブックガイド」**（とても便利な情報である）、**「関連略年表」**も書かれている。現在、日本の北朝鮮研究の第一人者であろう。

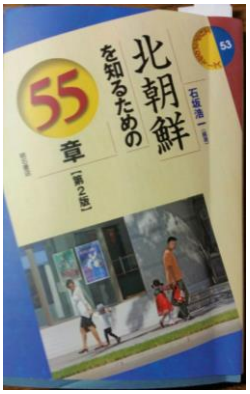
２．太田 修（おおた・おさむ）1963 年生まれ。同志社大学グローバル・スタディーズ研究科教授。朝鮮現代史、近現代日朝関係史。

：第Ⅶ部 日朝関係と日本の選択 第 46 章 1980 年代までの日朝関係 国交樹立の２度のチャンス～第 55 章 日本における交流運動 北朝鮮の人びととよりよい関係をつくるために　１０ケ章執筆。

３．文 浩一（ムン・ホイル）1967 年生まれ。朝鮮半島経済論・人口論。

：第Ⅴ部 北朝鮮の経済と暮らし 第 26 章 地理と自然 変化に富んだ気候と豊かな天然資源～第 35 章 食糧事情 生産の回復と供給システムの不備。１０ケ章執筆。

第Ⅵ部 北朝鮮の社会と文化 第 36 章 北朝鮮の教育 義務教育の延長と高等教育の整備～第 40 章 環境問題と政策 課題としての山林資源の衰退 ５ケ章執筆。**合計１５ケ章**を執筆されている。



４．大島 裕史（おおしま・ひろし）1961 年生まれ。ジャーナリスト。**：第 45 章 北朝鮮のスポーツ事情 国際大会の好成績と政治の存在　１ケ章**執筆。

★北朝鮮文化研究の４名

北朝鮮の文学、映画、絵画、音楽など文化を紹介した４名の研究家の登場である。**各１ケ章**執筆。

５．布袋 敏博（ほてい・としひろ）1952 年生まれ。早稲田大学国際教養学部教授。朝鮮近・現代文学

：第 41 章 北朝鮮の文学 パルチザン神話から現実課題克服の模索へ　８ページ。

６．門間 貴志（もんま・たかし）1964 年生まれ。明治学院大学文学部芸術学科教授。アジア映画史

：第 43 章 北朝鮮の映画 発展の途上から低迷へ４ページ。

７．喜多 恵美子（きだ・えみこ）1966 年生まれ。大谷大学文学部国際文化学科教授。朝鮮近現代美術史

：第 44 章 新しい「朝鮮画」主体美論の実践　５ページ。

★８．山根 俊郎（やまね・としろう）1951 年生まれ。韓国・朝鮮歌謡研究家。

：第 42 章 スローガンとしての音楽 革命闘争と体制賛美　７ページ。

★今までのいきさつ

この「北朝鮮を知るための 55 章」は、【第２版】である。初版の「北朝鮮を知るための 51 章」（Ｐ281）が 13 年前の 2006 年２月 15 日に同じく明石書店から発行された。

初版は、「映画」も石坂 浩一さんが執筆されていたが、第２版では、門間 貴志さんが執筆されている。その他は、同じメンバーが同じテーマで執筆している。

私が明石書店編集部から第２版の原稿依頼を受けたのは 2017 年５月であった。私としては金正恩時代の記述に苦労したが、むくげ通信・歌（ノレ）欄などで実験的な執筆を実践してきたので自信があった。

約束通りに 2017 年９月末に原稿を提出したが、なしのつぶて、ようやく翌年 2018 年８月に初校の校正があり、大きく動く情勢の為、今年（2019 年）３月に念校校正がやっと終わった。２年越しの完成となった。

★第２刷・増刷決定！！！

４月 23 日に明石書店編集部から**「『北朝鮮を知るための 55 章』では、大変お世話になりました。お蔭様で、同書は、初刷 2500 部のところ注文が多く、在庫 200 を切りましたので、1000 部増刷することになりました。」**というれしいメールをいただいた。

★１９６７年唯一思想体系の確立

1967 年金日成首領への個人崇拝の本格化、唯一思想体系の確立過程について各章の記述を見てみたい。

（１）第 II 部 北朝鮮国家の歴史　第 9 章 自主路線の選択 中ソへの不信感　石坂 浩一 P69

６７年５月 17 日、『労働新聞』の社説「党員たちの勤労者たちの中で唯一思想体系を徹底して確立しよう」で初めて「唯一思想体系」という言葉が現れた。６月から７月にかけて朝鮮労働党中央委員会第４期第 16 次全員会議が開かれ、「全党に唯一の思想体系をいっそう徹底して樹立する」ことが打ち出された。

朝鮮はいずれの国にも依存せず自主路線を選択し、それを守りうるひとりの首領のもとに団結するという方針である。もちろん、首領はキム・イルソン以外にはありえなかった。こうして、国際関係の緊張の中で北朝鮮は国家社会主義の上に独特の政治体制を構築することとなったのである。北朝鮮の自主路線を象徴する言葉が「主体思想」である。1970 年 11 月、平壌において朝鮮労働党第５回大会が開催され、主体思想は党の唯一思想体系とされ、それに基づく党の統一とりあえず団結が強調された。要職は満州派によって掌握された。

（２）第 41 章 北朝鮮の文学 パルチザン神話から現実課題克服の模索へ　布袋 敏博 P222

次に大きな転機が訪れるのは、１９６６、６７年５月４日から開かれた朝鮮労働党中央委員会第４期第 15 次全員会議で、党の唯一思想体系確立の問題が討議されたが、これは前年６６年 10 月５日の党代表者会議での決定を受けてのものであった。ここから現在の体制＝主体思想にもとづく体制へと直結する動きが開始される。

文学においてもこうした政治的体制の確立を反映した活動が始まる。革命伝統の重視とその作品化、革命領導（主席）・領導（総書記）の形象化、そのための集団創作などである。叢書『不滅の歴史』（1972 年～）、『不滅の嚮導』（1992 年～）シリーズはその代表的なものであるが、『血の海』（1969 年）『花を売る乙女』（1972 年）などの抗日映画や、革命演劇、革命歌劇などの制作も、文学を幅広くとらえれば、これに相当する動きである。

（３）第 42 章 スローガンとしての音楽 革命闘争と体制賛美　山根 俊郎 P229（増刷後）

キム･イルソン首領 崇拝の時期（1967～1989年）

北朝鮮では６７年以降を「社会主義建設時期（二）」と規定しているが、大きな変化が押し寄せた。キム・イルソン首領への極端な個人崇拝の時代を迎えたのである。６７年６月朝鮮労働党中央委員会第４期第 16 次全員会議で労働党の唯一思想体系が主体思想として確立されると反党反革命宗派分子の粛清の嵐が吹き荒れた。その結果、歌謡の歌詞は①キム・イルソンの抗日パルチザン闘争の賛美、②キム・イルソン首領の温かい配慮をテーマにした個人崇拝に変わる。既存の有名歌謡にもキム・イルソン首領を登場させる“改詞”を行い、作詞を個人名から“集体”（集団創作）に変更させてしまった。また、民族音楽が強調されて大学ではベートーベンなど西洋の古典音楽書籍の「焚書」が行われ、民族楽器の改良玉流琴の製作や“濁声”を除去する“主体式発声法”が開発された。

７０年代にはキム・ジョンイルが主導して①『血の海』（ピパダ歌劇団、７１年）をはじめ②『花を売る乙女』（万寿台歌劇団、７２年）、③『党の真の娘』（朝鮮人民軍協奏団、７１年）、④『密林よ 語れ』（平壌芸術団、７２年）、⑤『金剛山の歌』（平壌芸術団、７３年）の“五大革命歌劇”が相次いで創作された。『血の海の歌』（主題歌）、『総動員歌』（挿入歌）や『花を売る乙女』（主題歌）は一世を風靡した。

(4) 第 43 章 北朝鮮の映画 発展の途上から低迷へ　門間 貴志 P234-P235

北朝鮮映画史の分水嶺というべき事態が１９６７年に起こった。キム・イルソンの最大の政敵であったパク・クムチョル（朴金喆）らを中心とする甲山派の粛清である。東欧型の国家運営を考え、人民の生活向上のために軽工業振興を図り、個人崇拝を批判した甲山派の政治家たちは、南進に備え重工業を優先するキム・イルソンのパルチザン派と衝突したのである。文芸界の分野に甲山派が築いていた人脈も、キム・イルソンにとって脅威だった。映画人たちは部分的にではあるが西側の映画理論などを知り、それを取り入れようとさえしていた。労働党の宣伝扇動部にいたキム・ジョンイルが文芸界の刷新に取り組むことによって、北朝鮮映画はキム・イルソン思想を絶対視する「チュチェ映画」へと大きく舵を切った。一部の映画人は地方に追放された。外国の映画理論は遮断され、キム・ジョンイルの著した『映画芸術論』が指針となった。

撮影所は拡張され、設備も一新された。キム・ジョンイルが製作の陣頭指揮をとった大作革命映画『血の海』（69 年）や『花を売る乙女』（72 年）は絶賛され、映画改革は一定の成果をあげた。しかし、思想優先の映画製作は映画人の創造性を縛り、ほどなくマンネリズムに陥った。（終）